



絵の無い紙芝居  
「新・カチカチ山」

hirotsugu ko

— 1 —

むかしむかし、あるところに、とても緑豊かな山があったそうな…

そして、そこで手に入る木材は、とても質が良かったので、その木材を加工して作られたテーブルや箆筒は、日本各地で大層な評判を呼んだのでした。それに目を付けた領主様は、巨万の富を築こうと、村中の若者たちを雇って、次から次へと木の伐採を命じたのでした。

「山に生えている木を、根こそぎ伐り倒すのだ。そして、どんどんテーブルや箆筒を作って、それを日本各地にいるお客さんに売って大儲けをするのだ」

こうして、領主様は、日本一の大金持ちになりました。しかし、そのおかげで緑豊かな山は、たくさんの木を失い、荒れ果ててしまったのでした。

— 2 —

その領主様が治める村には、畑仕事で生活している翁と媪が住んでいました。真面目な翁と媪は、いつも汗水をたらしながら鍬を振るい、作物を丹精込めて育てておりました。

「この調子だと、今年もたくさんの大根や芋が収穫できそうじゃな」

夕日に照らされた畑の作物を眺めながら、翁が手を休めてにっこりと笑うと、

「そうですね。収穫の 때가、とても楽しみだわ」

媪も続いて、にっこりと笑いました。と、その時、そんな幸せそうな様子を、木陰からじっと見つめる一匹の狸が現れたのでした。

「うまそうな大根や芋だな」

山から下りてきた狸は、腹を空かせながら、そう呟くと、

「よし…今夜、奴らが寝ている間に食べてしまおう」

ニヤリと笑ったのでした。

— 3 —

次の日、翁と媪は、狸に食い荒らされた畑を見て、呆然と立ち尽くしました。

「おお、なんと言うことじゃ。手塩にかけて育ててきた大根や芋が、すべて食べられてしまうたわい」

そのぼやきに、

「まあ、なんて酷い…このままでは、私たちは飢え死にってしまうわ」

媼は口に手を当てて、涙をポロポロこぼすと、

「一体、誰が…」

翁は、顔を歪ませながら頭を抱えました。すると、ふいに一匹の兎が彼らの前に現れ、こう話かけてきたのでした。

「おじいさん、おばあさん…昨晚、僕は見たんだ。狸の奴が、この畑を食い荒らしているところを…」

その兎の話を聞くと、

「そうじゃったのか。だが、育てた作物は、もはや彼の胃袋の中…悔しいが、どうすることもできん」

翁は残念そうに、そうこぼしました。すると、

「お悔しい気持ちは、よくわかります。ならば、この悪事に対して、せめて彼を懲らしめて参りましょう」

翁に同情をした兎は怒りを露わにし、ぴよんぴよんと飛び跳ねながら、狸のもとへと走ったのでした。

— 4 —

腹いっぱいになっていた狸は、山の中で大きないびきをかきながら寝ていました。と、その時、兎が目の前に現れ、彼をたたき起こしたのでした。

「何の用だ？」

眠りを妨げられた狸が、ボリボリと頭をかきながら尋ねると、

「いい儲け話があるんだ」

そう言って、兎はにんまりと笑いました。

「本当か…聞かせてくれよ」

狸が、そう聞き返すと、

「この薪は、とても質の良いものなんだ。これを売れば、大金持ちになれることは間違いないんだけど、僕には重すぎて運ぶことができないんだ。そこで、これを君に担いでもらい、山の麓の街まで運んで欲しいわけだ。儲けた金は、二人で山分けしよう」

兎は、薪の束に指を差して、そう答えました。すると、

「お安い御用だ。任せておけ」

狸は、大きく高笑いして、薪の束を背に担ぎました。

「ありがとう。ならば、さっそく出発しよう」

こうして、狸は、兎と共に喜び勇んで山を下りようとしたのでした。

そして、険しい山道を歩き始めてから少し時間が経った時、ふいに兎は、こう口を開いたのです。

「この薪は、大切な商品だ。運んでいる最中に抜け落ちないように、僕は君の後ろから目を光らせておくよ」

兎が、そう言って、狸の背後に回ると、

「そうか、よろしく頼むぜ」

二人は、縦に一直列となって歩き始めました。

「そろそろ頃合いだな…」

兎は、そう呟くと、火打石を取り出して、薪の束に向かって「カチカチ」と鳴らせました。その音を聞いて不思議に思った狸が、兎に尋ねると、

「ここは、カチカチ山だ。ちなみに、その名の由来は、カチカチと鳴く鳥がいることから名づけられているんだよ」

その説明を聞いて納得し、

「へえ…意外と物知りなんだな、お前は」

振り返ることなく歩みを続けたのです。と、その時、火打石から出た火花によって、狸の担いだ薪の束から、もくもくと煙が上がり始めました。そして、

「くんくん…なんだか焦げ臭くないか？」

薪の焦げる臭いと周りに広がる煙に、狸が首をかしげた瞬間、その束は急に勢いよく炎をあげて、こうこうと燃え出したのです。

「うわあ、火事だ！」

驚いた狸は、慌てて、その場から逃げようとしてしまいました。しかし、燃えているのは、自分が背負っている薪の束のため、火の手から逃れることはできませんでした。

「アチチ…助けてくれ！」

狸が、そう泣き叫びながら走り回ると、

「この畑泥棒めが…悪事を犯した報いを、とくと受けろ！」

兎は、声を荒げて言い放ちました。

「俺が悪かった…許してくれ」

「本当か…もう悪さはしないな」

「誓う…絶対に誓うよ。だから、火を消してくれ」

「わかった。ならば、おじいさんとおばあさんのところへ謝りに行くぞ」

兎は、そう言うと、桶に汲んだ水を炎に目掛けて放ち、火を消してやったのです。

こうして、兎は狸を連れて翁と媪の住む家を訪れ、狸に頭を下げさせたのでした。「今回は、本当にすみませんでした。もう二度と、このような悪事は致しません」

狸が丁寧に詫びを入れると、

「そうか、もう畑を荒らさないと言うのじゃな。ならば、許すとしよう」

翁は、やさしい顔をして狸の頭をなでました。そして、

「ところで、何故畑を荒らすような真似をしたのじゃ。山に住んでいれば、木の実やきのこなど食べるものがたくさんあるじゃろう？」

と、尋ねたのでした。すると、

「昔は、食べる物がたくさんありふれていました。しかし、この一帯を支配する領主様が、無造作に山の木を伐り出し始めてから、あっという間に荒れ果ててしまい、とうとう食うに困る状態となったわけです」

狸は、残念そうな顔をしながら、そう答えました。

「あなたは、腹ペコで飢え死にしそうだったから、背に腹は変えられないと思い立ったのね。何と可哀相な…」

それを聞いた媪が、涙ぐみながら頷くと、

「おじいさん、おばあさん…今回の一件の原因は、領主様にあると思います。ここは、我ら4人で、屋敷へ伺い、訴訟を起こすべきでしょう」

兎は、そう強く断言しました。その発言に、

「そうじゃな…みんなが笑って暮らせる世の中でないといかんわい」

翁は力強く頷くと、彼らは心をつにして、領主様の屋敷へと向かったのでした。

領主様の屋敷へたどり着いた翁たちは、侍従の者たちに庭まで案内され、そこで領主様と相對したのでした。

「その者たち…今日は、何用で参った？」

屋敷の縁側より、領主様が翁たちを見下ろすと、

「近くにある緑豊かな山は、多くの木を伐り出されたことによって荒れ果てたため、そこへ住む多くの動物たちが嘆くことになったそうじゃ。何卒、これ以上の伐採をお止めて頂きたいと思ひ参上いたしました」

翁は、真摯な目で見つめながら、そう口にしました。

「それはできん…その山に生える木は、莫大な利益をもたらす元なのだぞ。その利益が

我が領内を潤おし、もっと豊かにさせることができるのだからな」

領主様が、そう答えると、兎は一步前に踏み出し、

「この狸は、荒れ果てた山で食べ物を手に入れることができなくなったため、やむを得ず翁の畑を荒らしました。豊かさを追い求めたばかりに、このような不幸なできごとが起きたのです。このことについて、領主様は如何にお考えられますか？」

二つの眼でしっかりと視線を注ぎながら、領主様に訴えました。そして、

「悪事を働いた俺に口を挟む権利はありませんが、一つだけ言わせてください。これ以上、俺みたいな不幸な者が現れないようにして下さりませ」

その兎の言葉に続いて、狸は涙ながらに土下座をしました。すると、

「その方ら…」

領主様は、眉間にしわを寄せて睨みを利かせたが、

「どうお考えなされますのか！」

兎は、その圧力に屈することなく語尾を強めたのでした。その堂々たる態度に、

「わはははは…」

心を打たれた領主様は、大きく笑い、

「ふむ…豊かさだけでは、幸せとなれぬと申すか…」

少しの間、静かに目をつぶると、

「そなたたちの言い分は、よう分かった。これからは、悪事を考える者が出ることなく、皆が幸せに暮らせる世の中となるよう取り計ることにしよう」

穏やかな顔をして頷いたのでした。

こうして、領主様は、被害にあった翁と媪へ十分な食糧を援助し、荒れ果てた山に対して大金を投じて植林をし、緑化活動を行ったのでした。その結果、山は元の姿を取り戻し、人と動物が幸せに暮らせるようになったそうな…

めでたし、めでたし…